

研究班番号【 19 】
n-bunaを解体する/歌詞から読み解く人間”n-buna”

国語班: 東本 成龍、野口 陽向、柴田 凌太

Abstract

The purpose of this study was to elucidate n-buna's past in order to better understand the songs written by n-buna. Focusing on the transition of themes from album to album, the study examined the lyrics of n-buna's songs by unraveling the lyrics of the songs written by n-buna. n-buna's lyrics are used in the study because n-buna has stated in interviews that he reflects his own experiences into the lyrics. As a result, we were able to infer that the "you" in the song is a real person, someone who had a close relationship with n-buna himself in the past.

要約

本研究の目的は、n-bunaの過去を解明することで、n-buna作詞の楽曲をより理解できるようにすることである。アルバムごとのテーマの変遷に着目し、n-buna作詞の楽曲の歌詞を紐解くことで考察した。n-buna作詞の楽曲の歌詞を考察に使うのは、n-bunaが歌詞に自分の経験を投影しているとインタビューで発言したからである。その結果として、楽曲中の「君」は実在しており、n-buna本人と過去に親交が深かった人物であると推測できた。

1. はじめに

人気ロックバンド「ヨルシカ」の作詞作曲を行っているミュージシャン、n-buna(ナブナ)。2017年にヨルシカとしてメジャーデビューする以前も、2012年から曲を自主制作してインターネットに投稿し、人気を博していた。彼はその人気に反して、自分の過去や身元をほぼ明かさず、自分の顔すらメディアに公開していない。しかし彼はインタビューで「自分の書く歌詞には私的なものが多い」とも語っている。よって私達は、彼の書く歌詞から彼の人生を推測し、彼の曲をより理解できるようにしようと思い、研究を始めた。彼の曲やアルバムの意味を考察しているものはインターネット上にも多いが、殆どが一つひとつ曲、アルバムごとに読み解いている。そのため、n-buna本人の人生に注目して、彼が作ったすべての曲を一貫した観点で読み解いているという点では、この研究は独自性があるといえる。

2. 研究手法

メジャーデビューする以前、以降を問わず、彼が公開しているすべての曲の歌詞の意味を独自に読み取り、そこから彼の人生を推測する。必要に応じてインターネット上のインタビューの内容なども活用する。また、曲調やミュージックビデオなどの、歌詞以外の曲の内容は考慮しない。しかし、ヨルシカのアルバム「だから僕は音楽をやめた」と、それ以降のアルバムには、独自の設定やストーリーがあるため、それは歌詞を読み解くために利用する。

3. 結果と考察

まず、n-bunaの歌詞は、2012年に曲作りを始めてから今までのほぼ全ての曲が「僕」と「君」という二人の登場人物を軸に作られていることが分かった。また、殆どの曲で「君」が「僕」から離れていく、という共通のイメージが描かれていることが分かった。何十もの曲で、何年にも渡って一つのテーマを描きつづけていることから、歌詞に出てくる「君」はすべて同一人物で、かつて実際にn-bunaと別れた実在の人物であると考察し、その考察をもとに歌詞を読み解いていくことにした。以下、実在したと思われる「君」を「Aさん」と呼称し、歌詞中の「君」という表現と区別する。同様に、以下n-bunaと書いた場合、歌詞中の「僕」ではなく実在する

n-buna本人を示す。

次に、Aさんとn-bunaの関係性を歌詞から考察する。以下のような歌詞がある

違う、答えはない ずっと好きだってわかってよ(中略)ねえ わかつてたって僕は君を
じやあね (2013年「さよならワンドーノイズ」より)

そして人生最後の日、君が見えるのなら きっと、人生最後の日も愛を歌うのだろう
全部 全部無駄じやなかつたって言うから ああ いつか人生最後の日
君がいないことがまだ信じられないけど (2017年「言って」より)

歌え 人生は君だ 全部君だ ずっと消えない愛の色だ (2019年「雨晴るる」より)

上記の歌詞はどれも「愛」という単語が用いられており、文脈から、その愛の対象は「君」であることがわかる。他の歌詞でも「愛」という語や恋愛を連想させる表現が「君」に対して使われており、ここからn-bunaはAさんに恋愛感情を抱いていたと考察できる。また、「言って」と「雨晴るる」では「愛を歌う」といった表現が用いられており、このことから、曲を作っているn-buna本人にとってもAさんへの愛を曲に込めることは重要なテーマなのではないかと考察できる。

また、なぜ「君」と別れこととなった理由に関しては、以下のような歌詞がある

君が「嫌い」きらいなんて 言葉 鑄びついて聞こえないや 愛?のない? 痛い容態
(中略)そう、これでお別れなんだ (2013年「透明エレジー」より)

意地張って 傷つけただけ 堪えてたものは溢れていくのに (2014年「アイラ」より)

胸を抉って 割り切れないのも知ってたんだろ 深い雨の匂いだって忘れるだけ損なのに
(2019年「6月は雨上がりの街を書く」より)

「透明エレジー」では「君」が「僕」に「嫌い」と言ったことが読み取れ、その後「愛のない」「これでお別れなんだ」と続く。「アイラ」では「意地張って傷つけただけ」とあり、「6月は～」では主語は省略されているが、「僕」が割り切って受け入れられないことを知っておきながら「君」が自分の胸を抉るようなことをしたと読み取れる。ここから、Aさんは好きな人だったが、n-bunaとは喧嘩別れをしてしまったと考察できる。「アイラ」の「堪えてたもの」や「6月は～」の「深い雨」は、それに伴う涙のことだと読み取れる。

更に、n-bunaの歌詞、特にメジャーデビューする2017年以前の歌詞には、「夢と挫折」がテーマになっているものが多く、戦術の「君が離れていく」というイメージと合わせて「憧れの君に追いつけず挫折する」というテーマが多く描かれる。それらを踏まえて、以下のような歌詞がある。

待って 分かつてよ なんでもないから僕の歌を笑わないで
(中略)今 心の奥 消える光が 君の背を搔き消した
触れる跡が 夢の続きを始まらない 僕はまだ忘れないのに
光に届く 間に揺らめく 波の奥 僕の心に君が手を振っただけ「なんて」
そっと塞いでよ もういらぬから そんな嘘を歌わないで
信じてたって笑うようなハッピーエンドなんて (2014年「ウミユリ海底譚」より)

君の書く詩を ただ真似る日々を 忘れないように 君のいない今の温度を
(2019年「パレード」より)

君はどんな答えを探していたんだ ぱつと下がった喉の向こう
僕はなんで泣いてるんだ 僕はなんで泣いてるんだ
そうさ 君と願った夏の想いは 重なったって 握れちゃつたって
(2014年「七月 影法師 藍色 ロッカー」より)

まず「ウミユリ海底譚」では、「僕の歌」や「そんな嘘を歌わないで」とあり、「パレード」でも「君の書く詩をただ

真似る」とあり、他の曲でも「僕」と「君」が音楽をしているという表現は出てくる。ここから、Aさんも同様に音楽を作っていることと、音楽の面でAさんは当時のn-bunaより技術のある、憧れの存在であったことが分かる。また「ウミユリ海底譚」には「君の背をかき消した」「夢の続きが始まらない」「僕の心に君が手を振った」という表現があり、「七月～」には、「君と願った夏の想い」という二人共通の目標があったような表現がある。そして、先述の「君に追いつければ挫折する」というテーマと「恋愛感情を抱いていたが喧嘩別れをした」という考察から、n-bunaはかつてAさんと同じように音楽の技術を身に着けて、大好きなAさんと並び立って音楽をすることを夢としていたと考察できる。しかし、喧嘩別れによりAさんはn-bunaから遠ざかっていきその夢は叶わずに終わり、その経験が挫折として歌詞で表現されたのだと考えられる。また、n-bunaは挫折と同時に関係を修復できないほどの失恋をしたことになる。このような別れ方をしたことによって、「君が遠ざかっていく」というイメージが何年にも渡ってn-bunaの曲のテーマになったのだと考察できる。

このテーマはn-bunaのどの曲にも共通しているが、メジャーデビュー前と後で描き方が少し変わっている。メジャーデビュー以前は「君が今まさに遠ざかっていく」という描かれ方が主であった。しかし、2017年のメジャーデビュー後は「君」は「昔別れた思い出の人」として描かれる。メジャーデビュー以前の曲でも「君」が思い出の存在として描写されている曲はあるが、メジャーデビューして以降に「君」が今まさに離れていく存在として描かれることはほとんど無くなる。これは、n-bunaの年齢の変化によるものだと考えられる。彼が初めて曲を公開したのは16歳の時で、当時から「君」との別れを歌っているため、Aさんとはそれ以前の学生時代に親しくし、別れたのだと分かる。しかしメジャーデビューしたのは22歳のときであり、Aさんと別れてからかなりの時間が経っている。そのため、n-bunaの中でAさんが記憶の中の存在に完璧に変わってしまったのだと考察できる。

そのテーマの転換点となるのが、2019年発売のアルバム「だから僕は音楽をやめた」である。このアルバムはストーリー仕立てとなっており、音楽をやめた青年「エイミー」が大病が悪い、余命いくばくもない状況に置かれそれをきっかけに旅に出て、旅先から親しい少女「エルマ」に「自分の人生からできた曲」を作り送ったものがこのアルバム、という設定。また、旅の終わりでエイミーは、病気で死ぬより前に自分で毒を飲んで崖から飛び降り、自殺してしまう。このアルバムに関してn-bunaは、インタビューで「このアルバムについては自分の思想だったり、過去の自分が思っていたことだと、そういうリアルな部分を極限までぶち込もうかと思って」と語っており、そこから、このエイミーはn-bunaがかなり濃く投影された人物であり、エイミーの人生からできた曲=n-bunaの人生からできた曲と分かる。

また、エルマに向けて書かれた曲なら、先述のAさんは関係ないと思ってしまうが、アルバムの歌詞中の「君」を全てエルマだと考えると矛盾が生じる箇所がある。例として、設定上、エルマとエイミーが出会った際、エイミーはバイトで生計を立てており、その時点では学生ではないのだが「空いた教室 風 摆れるカーテン 君と空を見上げたあの夏が いつまでだって頭上にいた(5月は花緑青の窓辺より)」という表現があり、この「君」とは学生時代に親しかったことが分かる。また、先程引用した「6月は花緑青の街を書く」もこのアルバムに収録されているが、「胸をえぐって」と歌詞にあるものの、エイミーとエルマが喧嘩したことは一度もない。同様に「パレード」もこのアルバム中の曲だが「君の書く詩を ただ真似る日々を」とあるが、エルマと出会った時点でエイミーは音楽をやめているため、エルマの詩を「ただ真似る」はずはない。よってこれらの「君」は、このアルバム以前の曲中でてくる「君」と共通の特徴がが多く同一人物と考察できる。これ以外にも、アルバム中の「君」をAさんと考えると自然な箇所が多く存在する。したがって、このアルバム中の歌詞で「君」とあった場合「エルマ」を指す場合と「Aさん」を指す場合があると考察できる。そのため、先ほどの考察でも「パレード」と「6月は雨上がりの街を書く」は引用した。

このアルバムでのAさんに関する表現としては「君(=Aさん)を忘れてしまう悲しみ」と「君を忘れないよう曲にする」という表現が多く見られる。しかし、これと同時に「君を忘れてしまい」という表現も見られる。これは、Aさんは最終的に喧嘩別れしてしまったため、Aさんの思い出は、楽しいとともに辛いものでもあるためだと考察できる。例として以下の歌詞を引用する。

黙ったらもう消えんだよ 馬鹿みたいだよな 思い出せ！ 思い出せないと頭が叫んだ
(「5月は花緑青の窓辺から」より。君を忘れていく悲しみ)

ずっと前から分かっていたけど 年取れば君の顔も忘れてしまうからさ
(中略)乾かないように想い出を 失くさないようにこの歌を
忘れないで もうちょっとだけいい (「パレード」より 忘れないよう君を曲にする)

人生ごとマシンガン 消し飛ばしてもっと 心臓すら攫って ねえ さよなら一言で

嬉しいことを消したい 悲しいことを消したい 心を消したい
(「夜紛い」より 君を事を忘れてしまいたいという感情)

また、このような感情の中でエイミー=n-buna自身を自殺させるということは、「君(=Aさん)との思い出にしがみついて苦しんでいる自分を殺して生まれ変わる」と言う意味があるのではないかと考察できる。

その考察のさらなる根拠となるのがこの「だから僕は音楽をやめた」の続編となる、2019年発売のアルバム「エルマ」である。エイミーの自殺によって残された先述の少女エルマが、エイミーが旅した経路を自分も旅し、その先々でエイミーへの思いを書いた曲がこのアルバムという設定。旅の終わりでエルマは、大好きだったエイミーに先立たれた悲しみなどから、エイミーと同様自殺しようとするが、生きていくことを決意する。このアルバムでも、設定上Aさんは関係ないものと思われるが、エルマは大好きであり憧れの存在であったエイミーに先立たれており、その点でAさんと別れこととなつたn-bunaと立場が一緒である。また、アルバム中に以下の歌詞がある。

誤解ばつかさ 手遅れみたいな話が一つ 頭の六畳間 君と暮らす僕がいる(「エイミー」より)

潮騒待ちぼうけ 海風一つで (「雨とカプチーノ」より)

「頭の六畳間 君と暮らす僕がいる」より、歌詞中の「僕」は「君」に対して恋愛感情を抱いていたと分かる。そして「手遅れみたい」とはもうその恋は叶わないと分かる。その恋が叶わなくなつたことを表していると分かる。また「潮騒待ちぼうけ」とあるが、潮騒は原義だと「波が大きな音を立てること」だが、n-bunaは文学作品をモチーフにすることも多く、そこから考えるとこの「潮騒」は情景描写であるとともに、三島由紀夫の代表作「潮騒」と関連していると思われる。小説「潮騒」は恋愛小説であり、主人公とヒロインが様々な苦労の末に結ばれるというストーリーである。それを待ちぼうけているということから、これも歌詞中の「君」に恋心を抱いていたが、それが叶わなくなつたということを表していると考察できる。これらから、エルマはエイミーに恋心をいだいていたが、エイミーと死別したことでの恋が叶わなくなつたのだと考察できる。これは、n-bunaとAさんとの関係とも一致する。したがって、エルマのエイミーへの感情には、作詞者であるn-bunaのAさんへの感情が反映されていると考察できる。その証拠に、このアルバムでも主に描かれるのは、これまでのn-bunaの曲と同様の「君との別れを悲しむ感情」である。そのため、先程n-bunaがAさんに恋愛感情を抱いていたと考察する際、このアルバム収録の「雨晴るる」を引用した。

このアルバムが他の曲と異なるのは、歌詞中の「僕(=エルマ)」がアルバムが進むごとに「君(=エイミー)」との別れを乗り越えて成長しようとする点にある。また、「君」と出会う前の「僕」を否定するような歌詞も多い。(自分を否定する歌詞は、このアルバムだけでなくn-bunaの多くの歌詞に見られる共通の特徴もある)以下の歌詞を引用する。

忘れるなんて酷いだろ 幸せになんてなるものか 色のない何かが咲いた 君のいない夏に咲いた(「神様のダンス」より 君との別れ、そして君を忘れていくことを悲しむ感情)

あの日まで僕は眠ってたんだ 言い訳ばかりで足が出なかつた 想像よりずっと
君がいた街の青さを (「雨晴るる」より 「君」と出会うまでの自分の否定)

こういった歌詞が多いが、アルバムが進むに連れ以下のような歌詞も出てくる。

あの丘の前に君がいる その向こうには何が見える 言葉ばかりが口を伝う
何も知らないで生きていたんだ (「歩く」より)

心の穴の奥に棲んだ 君の言葉に縋り付いた けど違うんだよ もう
(「心に穴が空いた」より)

君の人生になりたい 僕の人生を書きたい 君の残した詩のせいた 全部音楽のせいた
(「心に穴が空いた」より)

忘れたいこと わからぬことも僕らのものだ 長い夜の終わりを信じながら

(中略)さあ人生全部が馬鹿みたいなのに 流れる白い雲でもう
想像力が僕をなぞっている (「エイミー」より)

「その向こうには何が見える」や、「けど違うんだよ」のように、エイミーとの別れを意識しながらも、それを乗り越えようという意思が読み取れる。また、「君の人生になりたい 僕の人生を書きたい」とあるが、これは自分の人生を音楽として表現したエイミーのように、エルマも自分の人生を表現したいと思ったのだと考察できる。「忘れたいこと わからない～夜の終わりを信じながら」とあるのは、エイミーとの辛い思い出も受け入れようという意思の現れだと考察でき、「人生全部が馬鹿みたいなのに、想像力が僕をなぞっている」は、惨めな自分だけれど、それを表現したいというエルマの感情だと思われる。エルマはエイミーに憧れて音楽をしているが、憧れのエイミーとは別れてしまっている。これは、先述のn-bunaとAさんとの関係とも一致する。よってこれらの歌詞から、エルマはアルバム中の旅を通して「エイミーとの思い出を受け入れて乗り越え、むしろエイミーがくれた音楽で、これまでの自分を変えていこう」という結論に行き着き、旅の最後に自殺せずにこれからも生きていくことを決意したのだと考察でき、これはn-bunaがAさんとの別れに対して出した結論でもあると考察できる。

よって、自殺したエイミーは、Aさんの思い出に苦しむ過去のn-bunaであり、生きていくことを決意したエルマは、Aさんの想い出を前向きに受け入れ踏ん切りをつけた、これから生きていく新しいn-bunaだと考えられる。その証拠に、このアルバム「エルマ」の次のアルバム「盗作」では、それ以前のすべての曲でテーマであり続けた「君との別れ」がテーマではなくなっている。

4. 結論

歌詞中の「君」が全て同一人物で、実在した「Aさん」であるというのは仮定に過ぎないが、そのように仮定することで、n-bunaのほぼすべてのキャリアを通して、一貫性のある考察を行うことができた。そのため、かつてn-bunaと実際に別れた「Aさん」は実在しており、n-bunaの創作活動に強い影響を与えていると考えられる。

今後の展望としては、先述のアルバム「盗作」の次のアルバム「幻燈」では、再び「君との別れ」がテーマになっているため、なぜまたテーマが戻ったのかを探求していきたい。